

第207話 俳額⑤ 幕末の俳諧

中山町歴史散策

中山の俳諧は、松田未覚、青木定章らの元禄期前後の隆盛期を経ると、華々しい活動は残されていませんが、先に挙げた「俳諧歌枕」や「俳諧発句」など、獅子門指南書の入手に見るように、静かな就成期を待っていました。

時代は、文化文政期に入ります。この時期台頭した俳人としては、村山郡の俳諧再興のきっかけとなった吉川村（現西川町吉川）の五代目工藤三九郎俳号

稲州（寅吉）で、彼が生まれたのは天明7年（1787年）のことです。また、享和2年（1802年）には15代服部文右衛門が文新田に生まれました。この人は、俳号・画号ともに「武陵」と称した多彩な文人でありました。

また、柳沢の画人西塔太原（俳号 琴岱）は文化14年（1817年）、稲州の句帖流行に画を描き入れ、挿絵を持つ句帖の流行に先鞭をつけています。

このように、元禄期以降の律儀な句作態度から、幕末には多分に娯楽性、あそびの精神が

横溢した句会の風習が育ち始めていました。

もうひとつ、この期の句作の特徴に、神社仏閣に俳額を奉納するという風習が生まれていました。これは、神鎮めとともに句作の向上を願う参詣者に自らの句を披露できるという晴れがましさも加わって、豪農、豪商、郷村の有力者に限らず、すぐれた作品を掲げる力量を誇示する目的があったようです。

文政11年（1828年）、大井沢獅子口神社に、長崎、吉川の俳人を中心に、全国の著名俳人の句を集め、58句30人の俳額が奉納されています。

【用語の説明】

先鞭をつける…他に先んじて着手すること。他の人より先に始めること。

横溢する…水がみなぎりあふれること。また、気力などがあふれるほど盛んなこと。

※引用 中山町史 中巻
第10章第3節
文芸と美術工芸

私たち地域おこし協力隊です！ No.73

みなさん、こんにちは。地域おこし協力隊の高橋です。

7月1日からひまわり温泉ゆらら前の「〇っと」でも、スマホよろず相談所を行っていますが、最近は初めてご利用いただく方が増えてきており、とても嬉しく感じています。

さて、スマホの相談を日々行っていると、スマホを使えることが生活の前提になっていると感じることが増えてきました。ある方から「スマホが使えないと飯も注文できない」と言われたことがあります。まさにその通りだなと思います。電気代やガス代の明細もスマホで確認するのが当たり前となり、多くのサービスがスマホを介して提供されています。

もちろん、スマホに対しての好き嫌いや面倒くさいなど感じ方は人それぞれでしょう。しかし、生活の様々な場面で不便を感じるが増えているのも事実です。どんな些細な内容でも気軽に相談できますので、少しでも気になる方はスマホよろず相談所をご利用ください。

スマホよろず相談所

月・水・金(午前10時～正午中央公民館 / 午後1時30分～4時30分 〇っと)

●協力隊への問い合わせ先● 高橋 ☎662-2223 (総務広報課)



高橋 圭哉

出身地：宮城県岩沼市
趣味：けん玉、
アニメ鑑賞

